



# 対がん協会報

1部70円(税抜き)

第639号

2016年(平成28年)  
8月1日(毎月1日発行)

公益財団法人 日本対がん協会 「日本対がん協会」と「対がん協会」は登録商標です  
〒100-0006 東京都千代田区有楽町2-5-1 有楽町センタービル(マリオン)13F  
☎(03) 5218-4771 <http://www.jcancer.jp/>

主な内容	2面	日本臨床腫瘍学会学術集会報告
	3面	全国がん罹患モニタリング集計2012
	4、5面	ピンクリボンフェスティバル2016
	8面	リリー・オンコロジー・オン・キャンパス

## がん征圧全国大会 9月9日に京都市で開催

### 「京から明日へ がん征圧の明るい未来」

#### 主なプログラム

##### 【全国大会前日行事】

9月8日(木) 京都ホテルオークラ4F「暁雲(北)」

##### ■シンポジウム 15:00～17:40

- ・テーマ 「がん検診の現在～将来」(予定)
- ・シンポジスト(予定)

津金昌一郎氏 国立がん研究センター社会と健康研究センター長

西俣寿人氏 鹿児島県民総合保健センター所長

吉田千春氏 京都府京丹後市健康推進課課長補佐(保健師)

厚生労働省健康局 がん・疾病対策課ご担当者

コーディネーター 小西宏・日本対がん協会 がん検診研究担当マネジャー

##### 【がん征圧全国大会】

9月9日(金)10:00～12:30 ロームシアター京都メインホール

■表彰 朝日がん大賞、日本対がん協会賞(個人・団体)、永年勤続表彰、がん征圧スローガン最優秀賞、がん征圧ポスター最優秀賞表彰

■記念講演 山田邦子さん(タレント)

■京都府アピール

■主催 公益財団法人日本対がん協会  
一般財団法人京都予防医学センター

■特別後援 朝日新聞社

■後援 厚生労働省、日本医師会、京都府、京都府教育委員会、京都市、京都市教育委員会、京都府医師会、京都府歯科医師会、京都府薬剤師会、京都府看護協会、KBS 京都、NHK 京都放送局、京都新聞、京都新聞社会福祉事業団、京都府連合婦人会、京都市地域女性連合会

日本対がん協会と京都予防医学センター(日本対がん協会京都府支部)は、がん征圧月間の9月9日に京都市で「がん征圧全国大会」を開催する。今回で49回目。京都市での開催は36年ぶり2回目。

今年の大会テーマは「京から明日へがん征圧の明るい未来」。この春、厚生労働省のがん検診の指針が改正された。これを受けて日本対がん協会では、厚生労働省のがん対策研究班の分担研究として、「現場の実態に基づく検診のあり方に関する検討委員会」(研究分担者:垣添忠生日本対がん協会会長)を設けて、がんの罹患状況の変化を踏まえて将来のがん検診のあり方を考えるための議論を開始した。

大会前日のシンポジウムでは「がん検診の現在～将来」と題し、地域でのがん検診の状況、国のがん対策、将来のがん検診の姿について、昨年続き白熱した議論が交わされる予定だ。

全国大会当日はタレントの山田邦子さんが記念講演を行うほか、朝日がん大賞や日本対がん協会賞に選ばれた個人や団体の表彰、日本対がん協会グループ支部・提携団体の永年勤続者や、がん征圧スローガンの最優秀賞などを表彰する。

**がん相談ホットライン** 祝日を除く毎日  
03-3562-7830

日本対がん協会は、がんに関する不安、日々の生活での悩みなどの相談(無料、電話代は別)に、看護師や社会福祉士が電話で応じる「がん相談ホットライン」(☎03-3562-7830)を開設しています。祝日を除いて毎日午前10時から午後6時まで受け付けています。相談時間は1人20分まで。予約は不要です。

**医師による面接・電話相談(要予約)**  
予約専用 03-3562-8015

日本対がん協会は、専門医による面接相談および電話相談(ともに無料)を受け付けています。いずれも予約制で、予約・問い合わせは月曜から金曜の午前10時から午後5時までに☎03-3562-8015へ。相談の時間は電話が1人20分、面接は1人30分(診療ではありません)。詳しくはホームページ(<http://www.jcancer.jp/>)をご覧ください。

# がん教育の実践を呼びかける 佐瀬一洋教授 日本臨床腫瘍学会でパネルディスカッション



がん教育の実践を呼びかける佐瀬教授＝7月30日、神戸市

神戸市で7月末に開かれた第14回日本臨床腫瘍学会学術集会以「今、求められている学校でのがん教育」をテーマにパネルディスカッションが企画された。日本対がん協会とともに各地でモデル授業などを通してがん教育を実践してきている順天堂大学大学院の佐瀬一洋教授や、自治体のがん教育担当者らがこれまでの取り組みを紹介し、がん教育の現状や課題について議論を交わした。佐瀬教授は「がん教育には児童・生徒を中心に様々な立場の大人たちがまとまる不思議な力がある。まずはどんな形でもがん教育の実践を」と、がん教育への参加を呼びかけた。

## がん教育への感謝と期待

佐瀬教授はパネルディスカッションで、6年前に悪性骨軟部肉腫という希少がんと診断され、教科書的には不治の病と書かれていたものの、多くの人たちに助けられながら治療を受けて、生かされていることへの感謝の気持ちを示した。その上で、患者として、医師として、子どもを持つ親として、少しでも社会の恩返しになればという気持ちから、がん教育に取り組むようになったことを紹介。がん教育のモデル授業を実施するにあたって教材資料を準備したときに、①がんは不治の病ではないという知識を伝えること②喫煙

の影響や、がんの検診の受診など、行動変容につながること③リテラシーの三点に重点を置いて作ったことを説明した。

さらに「実際に授業を行って児童・生徒の輝く瞳やその感性が印象的だった。学校の現場の先生や教育

委員会の方は教育のプロで、色々なツールを持っていることもわかり、がん教育に大きなパワーを感じた」と語った。

また、厚生労働省なら、がんの予防早期発見、均てん化の話、文部科学省なら健康の大切さ、いのちの大切さの話といったように、縦割りとなっていたものが、がん教育といったキーワードでまとまることを指摘。「次の世代でがんがタブーにならないよう、ほかの色々な困難と同時に思いやりの気持ちと命の大切さを学べるように、どんな形でもがん教育の実践をまずはやってみましょう」と、参加者に呼びかけた。

## 大阪や神戸、岡山の取り組みも報告

パネルディスカッションでは、文科省の「がんの教育総合支援事業」としてモデル授業に取り組んでいる大阪府や神戸市の担当者から、事業実績について報告がされた。大阪府では昨年度はモデル授業に加え、府のがん対策基金を活用して「がん予防につながる学習活動支援事業」として7市の公立中学8校で実施したことが紹介されたが、学校現場では忙しいことから、この事業は教育委員会ではなく、健康医療部が担当している現

状なども示された。

一方、神戸市では、「いのちの尊さ」や「がん」をも乗り越える「いのちの強さ」を感じさせる「いのちの授業」としたモデル校で取り組んだがん教育の実践内容を実践事例集としてまとめて、市内各校に配布し、モデル校以外でも取り組めるよう検討を重ねていることが報告された。

## アンケートでは「やりたくない」も1割

また、岡山県のモデル校や要請があった学校でのがん教育の出前授業に取り組んでいる岡山大学病院血液・腫瘍内科の西森久和助教からは、岡山県内の小中高の養護教諭約400人にがん教育の進め方についてアンケートした結果が報告された。それによると、「やった方がよい」が約4割だったものの、「どちらともいえない」も約4割、「わからない」も約1割で、忙しい教育現場で気持ちが揺れていることが示された。また、「実際にやってみたいか」の質問には「やってみたい」と答えたのは約2割、「やりたくない」が約1割だった。西森助教は、教員自身の知識不足、授業時間確保の問題、生徒への心理的な配慮などがハードルになっていることを指摘した。

しかし、実際にはがん教育を実施した立場から「がん教育はやってみるとすごくおもしろい。今後につながる価値がある」と訴えていた。

(日本対がん協会マネジャー がん対策研究推進担当 本多昭彦)



「今、求められている学校でのがん教育」をテーマに開かれた日本臨床腫瘍学会のパネルディスカッション

# 全国がん罹患モニタリング集計2012

## がんと診断された人は86万5238人 前年より1万4千人増加

### 男女とも目立つ大腸がんの伸び 都道府県別データで地域差も浮き彫り

国立がん研究センターがん対策情報センターは、日本のがん罹患数・率の最新推計値を「全国がん罹患モニタリング集計(MCIJ)2012」にまとめた。MCIJの刊行は2003から数えて10冊目となるが、今回の2012年症例では初めて47都道府県すべてのデータが出揃い、東京都、埼玉県、静岡県、福岡県、宮崎県からも初めての罹患数公表となった。

それによると、2012年の1年間にがんと診断された人は、男50万3970人、女36万1268人、男女計86万5238人となり、11年と比べて1万3701人増え過去最多となった。

一方、高齢者の増加の影響を調整し

た、人口10万対の年齢調整罹患率は男447.8、女305.0、男女計365.6(前年比-0.2)と増加に歯止めがかかり、前年より少しだけ下がった。

#### 男性で順位変動

診断された患者数を部位別にみると、男性は胃がん(9万1006人)、大腸がん(7万7365人)、肺がん(7万6913人)、前立腺がん(7万3145人)、肝がん(2万8623人)の順で多く、女性では乳がん(7万3997人)、大腸がん(5万7210人)、胃がん(4万1153人)、肺がん(3万6134人)、子宮がん(2万5218人)の順となった。男性で増加が目立ったのは大腸がんで前年より5264人

増え、逆に前立腺がんの増加が頭打ちになり(前年より5583人の減少)、男性の順位が変動した。女性は順位の変動はなかったが、やはり大腸がんの増加が目立った(前年より4390人増)。

#### 都道府県別の傾向も明らかに

地域がん登録精度の向上などにより、昨年から都道府県のがん罹患と死亡の状況を地図上に示すことが可能になったが、今回初めて47都道府県すべてのデータがそろったことにより、地域ごと、部位ごとのがん罹患や死亡の傾向が明らかになった(図①参照)。

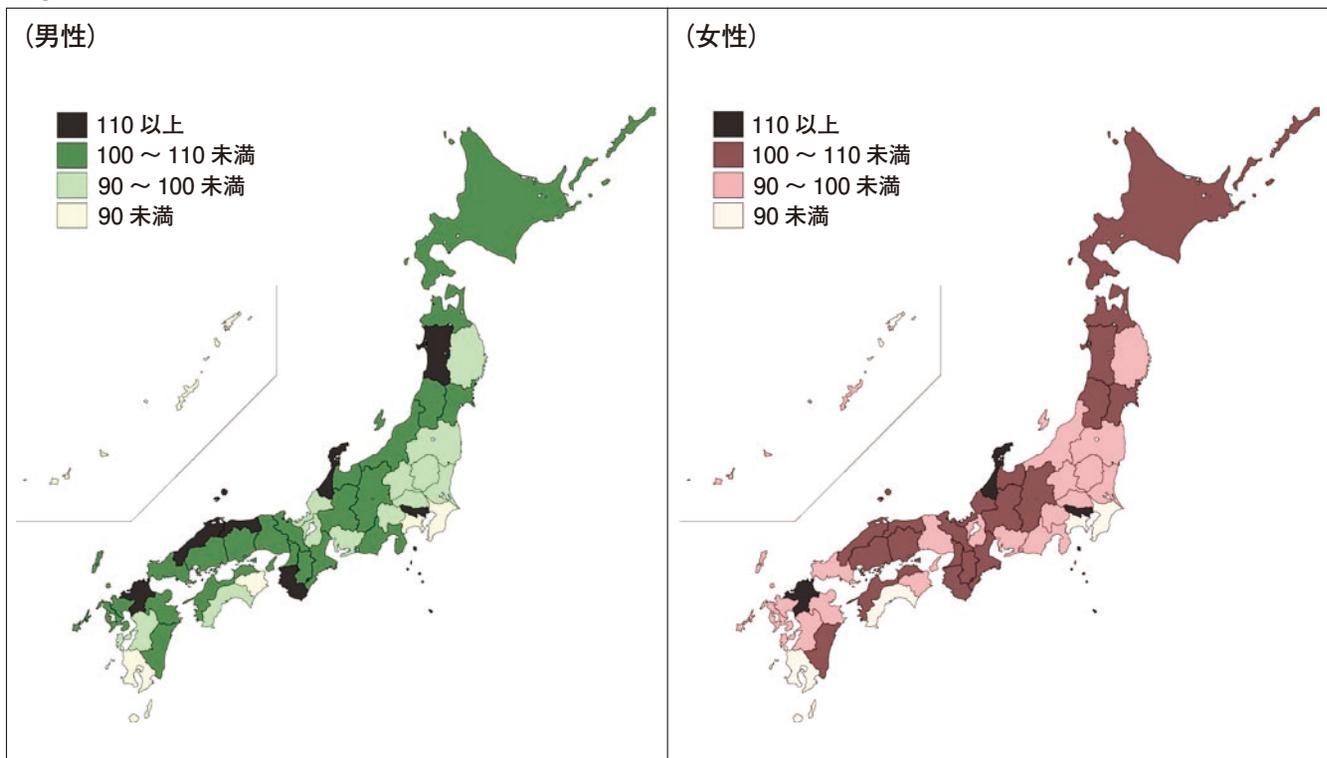
都道府県ごとの罹患率(全部位)を全国平均と比較すると、男性では秋田、和歌山、石川の順、女性では東京、福岡、石川の順に高かった。東京は男女とも高く、特に女性の乳がんが目立っていた。

表① 2012年の罹患数(全国推計値)が多い部位

	1位	2位	3位	4位	5位
男性	胃	大腸	肺	前立腺	肝臓
女性	乳房	大腸	胃	肺	子宮
男女計	大腸	胃	肺	乳房	前立腺

地域がん登録全国推計によるがん罹患データより作成

図①



比較可能地域 標準化罹患比(全国=100) 全部位(上皮内がんを除く) 2012年  
国立がん研究センターがん対策情報センター MCIJ2012より作成

## 特集 ピンクリボンフェスティバル2016

# 乳がんから大切な命を守るために 啓発ウオークやシンポジウムを各地で開催

ピンクリボンフェスティバル(日本対がん協会、朝日新聞社など主催)は、10月1日の街頭キャンペーンやライトアップなどを皮切りに、東京・神戸・仙台でスマイルウオークを、東京でシンポジウムを開催する。

## 今年も3都市でスマイルウオーク 神戸大会をリニューアル

13回目の開催となる神戸大会。発着会場を東遊園地からハーバーランドのスペースシアターに移し、コースも一新する。気軽に参加できる「みなとお散歩3キロ」(定員400人)を新設し、子供連れやシニア層の参加を促す。おしゃれな街並みのフラットなコース

で、モザイク横を抜けメリケンパークで折り返す。「清盛くん5キロ」(A・B各定員700人)は平清盛ゆかりの地を巡る。菜の花ロード、キャナルプロムナードを経て、兵庫大仏、厳島神社を訪ねる。コース半ばにある清盛くん像がユニークだ。出発式の有無でAと

Bに分け、時差スタートする。「神戸港町10キロ」(定員700人)は厳島神社までは5キロと同じ。湊川神社境内を抜け、神戸地方裁判所や県公館を通り、メリケンパークを経て戻る。エキゾチックな港町・神戸の雰囲気を満喫できそうだ。

観光客で賑わうハーバーランドからピンクリボンのメッセージを、参加者と共に神戸の街に発信したい。

開催日	エリア	会場	コース	出演者
10月1日(土)	東京	六本木ヒルズアリーナ	日本橋14km	谷野裕一先生(北里大学病院)
			丸の内11km	南果歩さん(女優)
			表参道6km	プレストキャンサーサバイバースコーラス
10月23日(日)	神戸	スペースシアター	神戸港町10km	玉木康博先生(大阪府立成人病センター)
			清盛くん5km	安藤美姫さん(フィギュアスケーター)
			みなとお散歩3km	
10月29日(土)	仙台	勾当台公園 いこいのゾーン	紅葉の宮城野10km	石田孝宣先生(東北大学)
			ぷらっと一番町5km	安藤美姫さん(フィギュアスケーター)

## 今年も1万5千点を超える作品応募 デザイン大賞最終審査会



熱心に話し合いながら審査

乳がん啓発ポスターのデザインや、コピーを公募する「第12回ピンクリボンデザイン大賞」(特別協賛: キリンビバレッジバリューベンダー(株)、富国生命保険相互会社、協賛: ホクト(株)、特別協力: (株)宣伝会議)の最終審査会が、7月22日、東京・港区の宣伝会議本社で開催された。ポスター部門は、昨年度コピー部門入選作「間に合え、勇氣。」を使ったA部門と、「夫婦」をテーマに検診受診を促すB部門で作品を募

集。ポスターA部門に504点、B部門433点、コピー部門には14,293点の作品が寄せられた。最終審査会に先立ち、患者やその家族を傷つけるような表現がないように患者会審査などを実施。その後、事務局・協賛企業審査を経て、最終審査会では6人のクリエイターによる厳正な審査が行われた。ポスター、コピー部門 グランプリ各1点、優秀賞、入選など計14作品が選ばれた。クリエイティブディレクターでコピーライターの中村禎審査員長は「今年は『下剋上』と『議論』の審査会。じっくり議論するうちに、高評価だった作品が入れかわってしまう下克上もあったが、最終的に全員納得がいく作品を選ぶことができた。とても自然でよい審査ができたと思う」と振り返った。クリエイティブディレクターでコピーライターの中村聖子さんは講



特別審査員のモモ妹

評の中で「初回から参加しているので、これまでものすごい数の作品を見てきたが、今年も『新しくよいもの』が出てきたことが驚きだ。有名人の乳がんがニュースになり関心が高まっているので、今回はダイレクトに検診に行こうとアピールした作品を選ぼうと考えた」と述べた。

今年は公式メッセージ・モモ妹がピンクリボン活動10周年を記念して、コピー部門から1作品に「モモ妹特別賞」を贈呈することになった。最終審査会では審査員と共に、モモ妹も

## 特集 ピンクリボンフェスティバル2016

時間をかけて作品を選んだ。特別賞受賞作は、モモ妹が今後さまざまな形で発信する。

なお、グランプリ作品の表彰式は、10月1日に開催するスマイルウオー

ク東京大会で実施し、同日発売の宣伝会議発行『月刊ブレーン』、ピンクリボンフェスティバル公式サイトで発表する。ポスター部門グランプリ作品は、「メッセージポスター」として、10月

のピンクリボン月間に交通広告として各地に掲出するほか、自治体などへデザインが無償提供を行い啓発に役立てられる。

## 南果歩さんが語る“乳がんとの向き合い方” ピンクリボンシンポジウム

「いっしょなら、きっと乗り越えられる。」と題して、10月2日に東京・千代田区の有楽町朝日ホールでシンポジウムを開催する。講師は中村清吾先生(昭和大学教授)、渡辺亨先生(浜松オンコロジーセンター院長)、保坂隆先生(聖路加国際病院リエゾンセンター長)。患者さんやサバイバーから人気の専門医が、乳がんの最新治療と心のケアについて講演する。

ゲストは今年3月に乳がんの手術を受けた女優の南果歩さん。夫である俳

優の渡辺謙さんが胃がんの手術を受けた後に乳がんがわかり、病気と向き合いながら、仕事復帰に向けて懸命に努力した日々を語っていただく。

シンポジウムに合わせ、ホール入口階にある有楽町朝日スクエアでは「なかまcafé」を初開催する。シンポジウムに来場する約6割が乳がんの経験者であることから、「ピンクリボンのなかま」として自由に話し合い、交流できる場として展開する。患者会、支援団体などがブースを出展するほか、ウ



スマイルウオーク東京大会にも出演する南果歩さん

イッグを試着できる体験コーナーや、相談コーナーなどを設ける。シンポジウムは参加費無料、事前申し込み制(抽選)で、定員700人。「なかまcafé」は予約不要で参加自由。

## インタビュー Just Stand Up!の歌詞は私の思いそのもの

ブレストキャンサーサバイバースコーラス(BCSC)代表 杠章子(ゆずりはあきこ)さん

スマイルウオーク東京大会会場の六本木ヒルズアリーナで素敵な歌声を披露してくれるBCSCは、メンバー全員が乳がん体験者のゴスペルコーラスグループだ。代表の杠章子さんがBCSCを立ち上げたきっかけは、日本のゴスペルシンガーの



パワフルな歌声を披露するメンバーたち

第一人者、亀渕友香さんのクリスマスコンサートに一般公募クワイア(聖歌隊)として参加した時の体験だった。

何度か参加していた恒例のコンサートだったが、その年はまるで違った。当時乳がんの治療が一段落したばかり。今年は立つことができないだろうと思っていた舞台上に立てた喜びと歌う事の楽しさ、なによりゴスペルの歌詞が今までになく心にしみた。

「奴隷として連れてこられたアフリカの人たちが、苦しみや悲しみを乗り越え、生きる喜びや希望を歌い上げたゴスペル。何があっても諦めず前を向いて生きて行こうという自分の思いと重なったんです」とその時の感激を語る。

乳がん体験者のゴスペルコーラス隊をつくりたい、と亀渕さんに手紙を書いた杠さん。亀渕さんも応援してくれBCSCを結成。始めはクリスマスコンサートのためにメンバーを募ったが、次第にもっと歌いたいという声が高まり、定期レッスンを開始。病院でのロビーコンサートなどを中心に活動の場を広げている。

「私自身、以前は世の中にこんなに乳がん体験者がいて、皆さん乳がんを患っても元気で活躍しているということを知らなかったんです。だから、一人でも多くの人にその姿を見て欲しかった。活動に歌を選んだのは何といっても楽しいし、受け取る側も自由な気

持ちで受け取れるから」と話す。

BCSCには杠さんが作ったルールがある。入会の条件は「乳がん体験者であること」「練習の場で病気の話はしない」「個人的な話をしない」といったもの。全員が乳がん体験者という共通の土台があるからこそできる、純粋に歌うことの喜びを味わうためのルールだ。

「こんなに華やかな舞台に私たちがいいのかしら」と謙遜する杠さんだが、「BCSCのステージを見てくださった方たちが、少しでも前向きな気持ち、笑顔になってくれたら」と意気込みを語る。当日は2008年にアメリカでビヨンセやマライア・キャリーら女性トップアーティストたちが歌い話題を呼んだ、がん撲滅のためのチャリティーソング「Just Stand Up!」ほか4曲ほどを披露してくれる。「Just Stand Up!」の歌詞のように、苦しみを乗り越えて前を向いていけるような歌声が六本木ヒルズに響きわたることだろう。

EUROGIN報告その2

# 子宮頸がん 検診、ワクチン接種… 登録と追跡の仕組みの重要性再認識

対がん協会報7月号で、子宮頸がんをテーマにオーストリア・ザルツブルクで開かれた国際会議・EUROGIN (ユーロジン、6月15～18日)で行われたさまざまなディスカッションや話題を報告した。8月号では全体を通じて見えてきた考察を総括として掲載する。

各国の研究者の発表を聞いて改めて感じたのは、レジストリ(登録制度)の重要性だ。もちろん、科学的にデザインされた臨床研究を進め、「科学的な証拠」を積み重ねることは検診を考えるうえで欠かせない。ただ、実際の検診のデータを分析し、そこに潜む「根拠」を浮かび上がらせ、施策の評価・修正につなげていくことが、がん予防ではとくに大切なことではないか、と思いついた。

とくに、検診の普及と日本人女性の子宮頸がん罹患率や死亡率の変化、検診の手法の変更が国民に及ぼす影響などについては、臨床研究ではなく、実際のデータを分析するのがポイントだし、それに勝るものはない。

ワクチンについても、本人や家族が拒否しない限り、全接種者を登録して長期に追跡していくシステムをこれからでも構築すべきではないか。とくに効果・副反応を的確に把握するには、こうした仕組みがなければ、客観的な判断が難しくなる。

会議で、オーストラリアの研究者らがワクチンの効果を発表したのも、ワ

クチン接種者の全国登録と、子宮頸がん検診の結果を突き合わせて解析できるからこそその業績だ。

同様のことは、北欧の国々の検診データにも言える。そういうインフラが整った国々でさらに科学的にデザインされた研究が積み重ねられている。

日本では、国が子宮頸がんワクチンを含む4つのワクチンの接種を促進した2010年秋～2013年3月に小6～高1だった年代の女子では接種率が70%ぐらいあった、とみられる。この年代が2014年から順次、検診を受ける「20歳」を迎えている。

日本対がん協会では、子宮頸がん検診の受診者に対してワクチン接種の有無を尋ね、検診の結果と照らし合わせて分析する、という調査を一部の支部の協力を得て実施している。この年代が、子宮頸がんの発症が目立つ20代後半から30代になった際、子宮頸がんの罹患率や死亡率が変化するのかどうかを少しでも早く把握できるようにという試みで、対がん協会に届く情報には直接個人の特定につながるデータは含まれないよう配慮して進めている。

ただ、検診と突合できるワクチン接種者の登録・フォローアップの仕組みは、国の主導のもとで全国的に構築する必要があると思う。

ワクチンの接種率が下がった世代への検診の啓発を考える上でも、欠くことのできない仕組みだ。

子宮頸がん検診で受診者の登録・健康管理に役立つ仕組みができれば、これを乳がん、胃がん、大腸がんなどに広げていくことは、さほど困難なことではないと思われる。検診登録制度でもある。

これを地域がん登録と連動させて様々に分析・研究することは、今後ますます増えることが見込まれるがんの予防を考えるうえで大切なデータの提供につながるのではないか。がん予防対策のPDCA(計画実行評価改善)は、検診のレジストリを構築することが前提であり、より効果的・効率的な対策を作り上げるためのプラットフォームになることは間違いないだろう。

(日本対がん協会マネージャー がん検診研究グループ 小西宏)

## 国立がん研究センター予測

### 新たながん患者2016年に初の100万人台に

国立がん研究センターは7月15日、2016年に新たにがんと診断される患者数と死亡数の予測を発表した。それによるとがん罹患数予測は101万200人(男性57万6100人、女性43万4100人)で、2015年の予測より2万8千人増えた。2014年から始めた予測で年間100万人を超えるのは初めて。

一方、がんで亡くなる人の予測数は、37万4千人(男性22万300人、女性15万3700人)で同じく約3千人増えた。

日本のがん統計は、罹患データは4

年から5年、死亡データは1年から2年遅れて公表されるため、これらの遅れを数学的な手法で補正して、現時点でのがん統計を予測する試み。がん罹患数予測は1975年～2012年までのがん罹患数や推計人口を元に、がん死亡数予測は1975年～2014年までの人口動態統計のがん死亡数実測値や同じく推計人口を元に算出した。後で予測を上回ったか下回ったかを調べ、がん対策の評価にも役立てる。

がんの部位別に見ると、罹患数は多

い順に、大腸(14万7200人)、胃(13万3900人)、肺(13万3800人)、前立腺(9万2600人)、乳房(女性 9万人)の順。死亡数は肺(7万7300人)、大腸(5万1600人)、胃(4万8500人)、膵臓(3万3700人)、肝臓(2万8100人)の順に多かった。

日本のがん罹患数は統計が作成され始めた1970年代から一貫して増加しており、死亡数も戦後一貫して増加している、国立がん研究センターは、この増加の主な原因は日本の高齢化人口の増加と説明している。

Topics

# がんで亡くなったデヴィッド・ボウイさんを追悼した “Paul Smith”チャリティTシャツでがん教育基金に寄付

ポール・スミス リミテッド／(株)ジョイックスコーポレーション

ポール・スミス リミテッド(東京・港区)と、日本で“Paul Smith”などを扱うアパレル製品企画・販売会社、株式会社ジョイックスコーポレーション(東京・中央区)は、がん教育基金に214万円を寄付した。

きっかけは、デザイナーであるポール・スミスの友人であるアーティスト、デヴィッド・ボウイさんが今年の1月にがんで亡くなったことだった。パリのポール・スミスショップでポー

ル・スミスがセレクトしたアイテムを展示・販売し、がんと闘病の末この世を去ったデヴィッド・ボウイさんへの想いを込め、収益の全額を国際がん研究機関に寄付。そして、日本でもデヴィッド・ボウイさんへの哀悼の意をこめた特別展示「Paul Smith + Masayoshi Sukita for David Bowie 2016」を東京のポール・スミス スペース ギャラリーと京



ポール・スミス スペースギャラリーでの特別展示

都のポール・スミス三条店で開催し、期間限定でチャリティTシャツを販売した。

この特別展では、デヴィッドさんの友人である写真家、鋤田正義さんの作品から厳選した写真や、貴重なプライベートコレクション

に加え、ポール・スミスがセレクトしたレコード、ツアープログラム、雑誌など思い出深いアイテムを展示した。

販売されたチャリティTシャツは鋤田さんの写真にポール・スミスの手書きのメッセージをプリントしたもので、Tシャツの利益の全額を公益財団法人日本対がん協会の「がん教育基金」に寄付した。



限定販売されたTシャツ

## かわいくて機能的なセラミック製キッチングッズ 「ピンクキッチンシリーズ」でピンクリボン活動を応援 京セラ株式会社



清潔感のある明るい色合い

京セラ株式会社は2008年から、カラフルキッチンシリーズの「ピンクリボン商品」を「ピンクリボン商品」として、収益の一部を日本対がん協会に寄付している。真っ白なセラミックの刃にピンク色が映えるかわいいデザインと機能性を両立した人気の商品だ。ナイフだけでなく、ピーラー、スライサー、おろし器、キッチンはさみなど、豊富なラインナップで、清潔感あふれる真っ白なセラミック刃とあざやかなカラ

ーリングがキッチンを明るくいろどるキッチングッズは、量販店や百貨店などで販売されている。ピンクキッチンシリーズはギフトとしても人気だそうだ。

宝飾応用商品事業部応用企画課の加藤千姫さんにお話を伺った。

「セラミックナイフは軽く、金属と比べて切れ味が長持ちするという特長があります。幅広い年齢の方が使うものなので、飽きのこないピンク色にこだわりました。全6色あるカラフルキッチンシリーズの中でも、ピンクが一番人気です」。

キッチンに立つことの多い女性たちやその家族の健康を応援したいという思いを込め、商品パッケージに乳がん啓発のミニ冊子を封入するなど、ピンクリボン活動の

理解促進にも積極的に取り組んでいる。

「キッチングッズということもあり、購入者は女性や主婦の方が多いですね。ミニ冊子もよく読まれているようです。販売の現場でも活動に賛同していただけることが多く、母の日や10月のピンクリボン月間の売り場づくりにも活かしてもらっています。さらにこの活動は社員の啓発にもつながっています。事業に即したチャリティ活動を継続していくことは、企業として大変有意義だと思っています」。



ミニ冊子はパッケージに封入されている

第6回

# 「リリー・オンコロジー・オン・キャンパス〜がんと生きる、わたしの物語。」 絵画・写真コンテスト

## 最優秀賞に藤井高志さん(絵画部門)と児玉秀俊さん(写真部門)

7月4日、東京・千代田区のJPタワーホール&カンファレンスで「第6回リリー・オンコロジー・オン・キャンパス〜がんと生きる、わたしの物語。絵画・写真コンテスト」の授賞式が開かれた(主催：日本イーライリリー株式会社、後援：日本対がん協会など)。

がんになっても自分らしく生きられる社会の実現を目指し、がんと告知されたときの不安や

がんと共生していく決意、そしてがんの経験を通して変化した自分の生き方などをエッセーとともに絵画や写真で表現する。米国イーライリリー社が2004年に始め、日本では2010年から開催。第6回目となった今年は、絵画部門33点、写真部門36点の計69点の応募があった。専門家やがん体験者らでつくる審査委員会が審査した結果、最優秀賞各1作品、優秀作品各1作品の計4作品が選ばれた。また、インターネットによる一般参加の投票による一般投票賞が2点選ばれた。

絵画部門で最優秀賞となった「羊の思い・わが記録」を書いた藤井高志さんは、人生はかくもドラマチックなものかと改めて思うとエッセーに記した。

2013年に定年まで2年を残して退職し、以前から希望していた油絵の制作に打ち込んでいた矢先の突然の血痰。検査の結果、いくつもの転移が認められる第Ⅳ期の肺がんと診断された。自分にも家族にとってもショッキングな



授賞式にて 中央左が藤井高志さん、右が児玉秀俊さん、右端がパトリック・ジョンソン日本イーライリリー社長

宣告を受けてしまったが、ルーチンの抗がん剤治療を続ける間の気持ちは穏やかであった。多少の副作用はあったが3年間が経過する中、国内、海外へ旅行したり、絵の個展を何度も開いたり、常人と変わらないかそれ以上のことができたことに驚きを感じた。

牧歌的風景を描こうとして取材した羊の姿がまさに自分自身に思え、いろいろなことがあっても羊のように穏やかな心境でいる精神力を保ちたいとの願いを込めた作品だと語る。審査員長で兵庫県立美術館館長の蓑豊氏からは、「絵もエッセーも素晴らしい。新しい命を北海道の大地で穏やかに生きる羊に投影した姿に感銘を受けた」との講評があった。

写真部門の最優秀賞は、児玉秀俊さんの「夜明けの賛美」。3年前、まったく体の異常を感じずに受診した人間ドックで偶然すい臓がんを発見した。突然、真昼間から闇夜に放り投げられたような気持ちが出て言葉も出ないほど

の驚きだったという。幸い早期発見だったので手術ができたが、再発、転移が不安だった。そんな時期に負のスパイラルになってはいけなと一念発起し、闇から明への瞬間を写真に撮ろうと決めた。長野県諏訪市の諏訪湖で寒い中を夜明け前からカメラを構えてこの一瞬を撮ろうと通った。

審査員で写真家の平山ジロウ氏は「一目見て美しい。写真で気持ちを表現することは非常に難しいのだが、この作品ではそれができている。病気のせいで今まで知らずにいたものが見えてくると作者は言っているが、自然の中にある宝物を発見できるという喜びが患者さんのQOLを上げることになるのかもしれない。諏訪湖から見える夜明けの富士山をとらえることが、児玉さんの活力(生きる力)になっているのでは」との講評があった。

一般投票賞の絵画部門は豊田明日香さんの「生を願う」、写真部門は最優秀作品となった児玉さんの「夜明けの賛美」が選ばれダブル受賞となった。

これまでの受賞作品は既に100か所以上の病院やイベント会場で巡回展示され、多くのがん患者さんたちに勇気と希望を与えている。

挨拶に立った日本イーライリリーのパトリック・ジョンソン社長は、「当社は本国では140周年、日本でも設立から41年を数え、このコンクールもよ



絵画部門最優秀賞 藤井高志作「羊の思い・わが記録」



写真部門最優秀賞 児玉秀俊作「夜明けの賛美」

うやく折り返しの6回目を迎えた。来年は絵画と写真部門に加えて絵手紙の部門も新設し、これからは『がんサバイバー』の皆さんに役立つよう、さらなる努力を続ける」とその決意を述べた。